

令和8年9月1日発行
企画・編集 松崎 靖
発行 (株)足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)
Tel 0277-73-1212
Fax 0277-70-1066

今月の題字
石山 慎介・愛さん

(みどり市大間々町)

大間々駅トイレ掃除や富弘美術館を囲む会群馬県支部の活動に夫婦で参加してくれている若きお二人は、みどり市の明るい未来を予感させてくれます。



小耳にはさんだ
いい話
(文責・靖)
《373》



映像と音と光を利用した円形の展示コーナー

富弘美術館リフレッシュオープン
みどり市市制施行20周年と美術館開館35周年を記念してリフレッシュオープンした富弘美術館の最新展示は、映像・音・光によって空間全体を演出し、見る人が作品の世界に入り込んだような体験ができるイマーシブミュージアムと呼ばれる最新技術の展示です。

円形の特徴的な展示室を一部屋まるごと使って、富弘さんが過ごした故郷東村(現みどり市東町)の鈴の鳴る道に入り込みます。

35周年記念展「愛、深き淵より」

星野富弘さんが世に知られるきっかけとなり、人生の転機となったのが、1981年に発刊された『愛、深き淵より』という本でした。同年に結婚した昌子さんと2人で制作した最初の作品『結婚指輪』も1981年に描かれ、富弘さんご夫妻の代表作として多くの人たちに感動を与えています。

1970年、不慮の事故により、頸髄を損傷し、手足の自由を失った富弘さんは、家族や周囲の人々の愛に支えられ、口を筆をくわえて描く作品は「詩画」という世界を確立しました。今回の企画展では、富弘さんの原点ともいえる著作『愛、深き淵より』に焦点を当て、苦難の道のりの中で磨かれた感性で描かれた作品をご紹介します。ぜひ会場でご覧ください。

今、富弘美術館では、「詩画の公募展」の応募作品を募集中。締切は九月末日。詩画を描くことで、富弘さんの世界を知るきっかけにもなります。

ハガキ一枚の力

者からの善意を、ネパールで困っている人たちに直接届けるというもの。そして支援者には必ず手紙で結果を報告してくれています。

今から十年ほど前、虹の架橋の読者で福岡県に住むNさんがOKバジに千円を支援しました。OKバジは二〇一九年に出版した著書『からっぽがいい』という本でその時のことをこう記しています。

『毎年父の日にネクタイを買うその代金の中から、千円寄付してくださる方がいる。ある年、その千円がネパールの山麓の子供たち

に、一冊二十円のノートを買ってプレゼントした。子どもたちがそのノートを高く上げた姿を

世界一小さな
足利屋
トイレ美術館

今月の絵《373》

大野勝彦さん『今しかない今』



熊本の犬野勝彦さんから届いた『やまびこだより』第125号に「昨日はダルマさんを描いた。まず眉を描いて目を描いて、鼻、口、体を描いて最後に瞳を入れる。出来上がったダルマさんが私を見て『心の中まで見透かしたぞ!』と感じる作品ができると、なぜか『よしよし』と頷いている」と書かれていました。大野さんからダルマさんの原画が届き「これを背中にプリントしたTシャツ作って」と頼まれました。今、大野勝彦美術館で販売中です。今回の令和8年熊本地震では、美術館には大きな被害はなかったそうでホッとしました。

写真に撮り、Nさんに送った。Nさんは、自分の千円がこんな形で活かされたことに喜びの手紙を送ってくれた。それを受け取った私も更に嬉しくなりお礼のハガキを書いた。小さな喜びのキャッチボールである。この種の喜びが私を励まして二十五年間私を生かしてくれました。私がたくさんの団体や個人の方々から支援金をお預かりできたのは、一見小さく見えるハガキ一枚の力だと信じている。

OKバジは、『人にあげることは自分の分が減ることだと思っていました。だから取ることで自分の分を増やすことと信じています。』六月八日が誕生日のOKバジは毎年桐生で誕生日を祝っており、来年は八十八歳の米寿を迎えます。



靖ちゃん日記

令和8年8月19日(水)
さくらもーるのセンターコートで「ありし日の富弘さん写真展」が始まった。2年前の4月28日に富弘さんが天に召され、その1か月後の5月28日に桐生の写真家、齋藤利江さんが撮影した富弘さんの日常の写真を見た時から追悼写真展を開きたいと、ひさかさに思っていた。

富弘さんの奥さんの昌子さんや、富弘さんと親しかった仲間から60枚以上の写真が集まり、10枚を展示、大好評だった。富弘さんは、足踏みミシンのような歩き方を捨てて大を飼い、「ミシン」と名付けて可愛がっていた。富弘さんとミシンや散歩中に夕焼けを見つめている写真や、富弘さんの妹さんが庭で小さなガラスの頭を撫でている写真を見て、富弘ファミリーの限らない優しいさを感じた。今までいたずらガラスは大嫌いだっただけ、この写真を見てから少し認識が変わった。さくらもーる「旅がらす」だった。

送り火や小さき指が燐寸擦る

ご先祖様がお帰りになる送り盆を子や孫と一緒に過ごせるのは幸せなことだと思いました。庭にお盆のお飾りを新聞紙に包み、孫がお焚き上げの役目を担いました。普段は燐寸(マッチ)を擦る機会のない孫にとっては慣れない挑戦でしたが、無事に役目を果し、お焚き上げの煙と共にご先祖様たちをお見送りできました。お盆やお彼岸は、ご先祖とのつながりに気づく大切な機会だと思います。また来年、家族みんなが健康で、ご先祖様を迎えたいことを願っています。



虹の架橋検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百七十四号は令和八年十月一日(木)発行予定です。